

小学校高学年にむけた文学の読解と教育方法の研究
一殊に複式教育による「教室内メンター」の介在に関して一

教育学部 大橋直義

【本共同研究の背景】

いかなる校種・発達段階においても、「読む」という行為は国語教育において不可欠の要素である。なかでも「文学」あるいは「物語」を読むという営みは、そのテキスト内部に時の流れが前提化されているという点において、人を人たらしめる基礎的要件であるとしてよい（韓非子「守株待兔」、列子「朝三暮四」など）。

本共同研究の最も遠い背景にはこのような問題意識を置いているが、その手前には、いかにして文学・物語を読むという行為を獲得しうるかという点を可視化すること、さらには、殊に複式教育の場における適切なカリキュラムの構築と一般化という課題を置いている。

【本共同研究の目的】

本共同研究は、上記の「背景」に照らして、小学校5・6年生の複式学級を対象とした教材・カリキュラムのデザイン・マネジメント案を提示し、「複式だからこそ可能となる学習」とそれを可能にする方法の構築を目指そうとしたものである。

【実施内容・概要】

本共同研究の計画段階においては、2019年6月15日（土）に開催された「複式授業研究会」に大橋が参加し、連携教員である宮脇隼先生（附属小学校・56年F組）の授業を参観して、指導助言を行うという点に重きを置いていたが、別に大橋が代表を務める共同研究要務が重なってしまったことによって、当初計画を変更せざるをえなくなった。

したがって、通年の複式授業において、上記研究会の成果を還元していただき、その成果と課題を共有することによって、方法の改善を行うということとなった。

[2019年6月15日（土）研究授業]

◎授業学級：56F

◎教科：国語科

◎授業者：宮脇隼

◎単元名：額縁構造をとらえて読もう（5年「わらぐつの中の神様」、6年「やまなし」）
：上記の2テキストは、「単式学級」の場合であれば、異なった時期にあてられるものであるが、宮脇学級においては、これを同じタイミングとするよう年間カリキュラムをマネジメ

ントすることによって、相乗効果を狙ったものである。

周知のように、この2テキストは、類同の「額縁構造」をもった作品であり（したがって、「背景」で言及した時間観念のありかたからすれば、より複雑系の構造をとっているとも言える）、5年生向け授業と6年生向け授業を適宜まじわらせることによって、次のような効果が得られる。

〔上級生〕テキストそのもの、およびその構造のありかたについても既習事項であり、反復することによって効果的な定着が見込まれる。

〔上級生および下級生〕異なるテキストを読んでいること、また、各学年における間接指導時の議論の推移によって、また、各学年における単元目標の相違によって、着眼の大きく異なるテキスト理解が生じてくる可能性は多々ある。「額縁構造」という共通したテーマについて、別の読み方を行なった集団を「メンター」と位置付け、自分たちの理解を相対化するという効果が見込まれる。

〔2020年1月16日〕

上記の研究授業の成果を通年の授業に落とし込んだ結果について、あらためて、大橋が聞き取りを行い、助言および今後に向けた課題を抽出した。

○「並行読書」との相違点

：単式学級においても、複数のテキストを読み合わせるという指導形態をとることはある。しかしながら、その場合には、双方ともに「初見」のテキストを読み解き、それぞれの「読み」を突き合せるということになる。この点、複式学級の場合には、上級生は既に読んだことのあるテキストを再読するという意味において、教室内に授業者以外の「メンター」が存在する。いわゆる「並行読書」に、複式学級なら比較的簡便に行なえるこの方法を導入するために、今後も検討が必要であるとの意見に達した。

○「テキスト構造」以外の観点からの比較

：各学年における読みを深め、かつ教科ごとの単元により適合させるために、「テキスト構造」以外の着眼点からも比較しうるような授業デザインが必要であるとの見解に達した。具体的には、「構造」以外に「表記」（平仮名／片仮名／漢字）、「表現」の共通性／「思想・思考」といった種々の観点からの討論が可能であろう。

【課題】

このようなカリキュラムデザインを行なった場合に生じてしまう課題には次のような点がある。一朝一夕には解決しがたい点もあるが、今後の継続課題としたい。

- ・年度内に転出を余儀なくされた児童生徒への対応
- ・次年度担当者への配慮：当該年度の翌年、授業担当者が変更となった場合の引き継ぎ方法